

# 「高齢者住宅新聞」2012年9月15日号に インディペンデンスヴィレッジ成城西の連載 第5回目が掲載されました。(全6回)

## 今回は青木様ご夫妻へのインタビューです。

### 第5回 激しい時代を切り抜けて

高齢者住宅を選ぶ際、多

くの人が「住み慣れた街にある」かどうかを第一条件とするのは、数々の調査結果からも明らかになっている。4年前に入居した青木辰男さん(84歳)とふみ子さん(80歳)夫妻も同様だ。現在住むマンションから一駅離れた成城学園前駅(東京都世田谷区)で約50年を過ごした。

実は二人は成城学園の出身。辰男さんは小学校1年で入学、ふみ子さんは女学校に入学した。二人の出会いはこの時。4歳年上の辰



のように降ってきた。

「女学校の時だったか、グラウンドを歩いていたら小型の飛行機が次々と爆弾を落とすようになって。子どもたちを脅すために敢えて人を外して爆撃してきたが、危うく打たれかかったこともあった」(ふみ子さん)

男さんは、ふみ子さんが所属する女学校のバスケットボール部のコーチに就いたことがきっかけで二人は距離を縮めた。今では70年余りの長い付き合いだ。当時は間もなく終戦を迎える時。学び舎にも、けたたましい空襲のサイレンと消しに上がった他校の生徒の多くが命を落とした。

### 「特別」はいらない



青木辰男さん(84歳)  
ふみ子さん(80歳)

「この状況がいつまで続くかわからないし、誰も助けてくれない。毎日が全力だった」(ふみ子さん)

◆ ◆ ◆  
終戦後、辰男さんは名門大学に進学し、大手銀行に

入行。二度海外に渡り新規事業の足掛かりを作った。その後同行役員として激動の時代を乗り越え、プライベートの多い多忙な毎日を送り、それをふみ子さんが支えた。リタイヤして、辰男さんが80歳の時に入居。それまで庭での園芸を二人で楽しんでいたが、次第にそれも重荷となり転居を考え出した頃だった。長年住み、知り尽くしている街であること、駅からの近さが決め

手。自宅の荷物を8割がた処分し、身も心もすっきりさせて移り住んだ。ふみ子さんの決断力が辰男さんを引っ張った。「ここにしたのは、仕事一筋だった主人が知らない街に移ってしまったら、家にとじこもりがちになるのではないかと不安だったから。二人ともよく知る街なので、今でも毎日のように成城学園前駅まで電車で行ってランチをしたり、買い物をする」。引っ越してからも生活リズムはほとんど変えていない。

辰男さんは「落ち着く場所であればいいし、年齢も年齢なので無理をしないです。」「取材協力・インディペンデンスヴィレッジ成城西」  
東京都狛江市。生活支援付きの高齢者向け分譲マンションとして平成15年に竣工。全68戸。  
※毎月15日号に連載します。